

### 『おもろさうし』における自立語の口蓋化と 非口蓋化の両様表記

間宮, 厚司 / マミヤ, アツシ / MAMIYA, Atsushi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

21

(発行年 / Year)

2001-07-14

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020169>

# 『おもろさうし』における自立語の口蓋化と非口蓋化の両様表記

間宮 厚司

はじめに

『おもろさうし』の表記とは一体どのようなものであったか、すなわち、発音どおり（表音的仮名遣い）か否（大和的仮名遣い）かという問題に筆者は関心を持っている。現在までの見通しを言えば、詠唱されていたオモロ（神歌）の実際の発音を表記者がほぼ聞きなしたとおりに表音文字の平仮名で表記したものである、ということになる。

ここで取り上げるのは、ミソ（御衣）を「みしよ」（口蓋化表記）と「みそ」（非口蓋化表記）、イタ（板）を「いちや」（口蓋化表記）と「いた」（非口蓋化表記）のように両様表記された自立語の例である。こうしたペアは『おもろさうし』の中のどのくらいあって、どのような比率なのか。そして、このような現象はいかに解釈すべきなのか。こういった視点からの考察は従来なかった。本稿では、その点を明らかにしたい。

なお、用例をピックアップするのに、仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』（角川書店）と、高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』（武蔵野書院）を利用した。

一

以下、『おもろさうし』の自立語に見られる口蓋化表記と非口蓋化表記の例（①～⑱）を列挙し、それぞれに簡単なコメントを付すが、▼印は口蓋化表記、▽印は非口蓋化表記を表すことにする。また、用例の所在は、「三」九六―15と記し、第三巻の九六番歌の15行にあることを示す。

①▼おみきやう（御み顔）↓「七」三八九―4（計一例）

▼みきやう（み顔）↓「三」九四―17「四」二〇五―9

「六」二九一―9「七」三六三―4、三六七―18「二二

七三二一14 「二四」一〇〇〇一9 「二〇」一三七四一9  
(計八例)

▽おみかう(御み顔) ↓「七」三八五一3 「八」四四二一4、四六四一5 「二三」八〇三一3 「二七」一一二一三二 「二二」一四二四一5 (計六例)

▽御みかう(御み顔) ↓「二一」六〇四一5 (計一例)  
▽みかう(み顔) ↓「三」一一二一16 「一一」五五九一17 「三二」一五五二一5 (計三例)

▽みかお(み顔) ↓「三二」一四五五一14 (計一例)  
▽みかおう(み顔) ↓「二二」六九五一13 (計一例)  
▽みかを(み顔) ↓「二二」一四一一17 (計一例)

①は、「御<sup>み</sup>顔」の全用例である。▼口蓋化表記は九例、▽非口蓋化表記は一三例。巻に注目してみると、「三」「七」「二二」は▼と▽の双方の表記が見えるので、巻間による偏り云々は言えそうにない。

②▼すづのわりきやね(鈴のわり金「人名」) ↓「二一」五六二一2 (計一例)

▽すづのわりかね(鈴のわり金「人名」) ↓「二二」一四一四一2 (計一例)

▼よなはわりきやね(与那覇わり金「人名」) ↓「二二」五六二一1 (計一例)

▽よなはわりかね(与那覇わり金「人名」) ↓「二二」一四一四一1 (計一例)

②は、「鈴のわり金」と「与那覇わり金」という同一の人名

表記が、▼と▽で見られるものである。各一例ずつの計四例しかないが、「二二」は▼、「三二」は▽という巻による違いがある。

③▼き、やし(聞かし) ↓「二三」七四九一4 (計一例)

▼き、やせ(聞かせよ) ↓「四」一七九一4 (計一例)  
▼き、やれ(聞かれ) ↓「九」五〇七一4 「一六」一一五五一3、一一七二一3 (計三例)

▽きか(聞か) ↓「二七」一一七七一3・7 (計二例)  
▼き、ゑ(聞け) ↓「二三」九五五一13・14 (計二例)  
▽きけ(聞け) ↓「二三」七七二一8 「一四」九九一五 (計一例)

③は、動詞「聞く」の例だが、「きか」「きけ」の口蓋化表記「き、や」「き、ゑ」は見られるのに、「きく」「きこ」を「き、ゆ」「き、よ」などのように書いた例は無い。

④▼しまうちゑきや(島討ち吉日) ↓「四」一六三一4 (計一例)

▽しまうちゑか(島討ち吉日) ↓「三」九三一4 (計一例)  
▼みきや(三日) ↓「二四」一〇四七一3、一〇四九一2 「二七」一一九七一3 (計三例)

▽みかい(三日) ↓「二四」九八八一4 (計一例)

④の▽みかい(三日)は、ミケ(御日)の音を表記しようとしたものなのかも知れない。類例として、「酒」を「さかい」、「尋め」を「とまい」と書いた例がある。ただし、ここは「か」

が「きや」になっていないので、一応非口蓋化表記としておく。

⑤▼にぎやよ(苦世)↓「一九」一三三〇一五・七(計二例)

▽にがよう(苦世)↓「一九」一三三〇一三「二〇」一三

九三一三(計二例)

⑤は、同じ「一九」一三三〇に両様表記が見られる。なお、口蓋化表記の▼の「世」は「よ」と書かれているのに対して、非口蓋化表記の▽の方は「世」が「よう」と書かれている点も相違している。

⑥▼みしよ(御衣)↓「二〇」五二三一四「二四」九八六一

7・8(計三例)

▼みしゆ(御衣)↓「七」三四九一七「二〇」五三五一七

「二二」七二九一七・9(計四例)

▽みそ(御衣)↓「二三」八四七一三、八四八一二、八五

三一八(計三例)

⑥は、▼に「みしゆ(御衣)」というへ〇↓uの変化したと考えられる例も見える。

⑦▼へとのみぢへりきよ(神女名)↓「二三」九七一―1

(計一例)

▽へとのみぜりきよ(神女名)↓「二七」二一八九―1

(計一例)

▼やわれみぢへりきう(神女名)↓「二三」七九八―2

(計一例)

▼やわれみぢへりきよう(神女名)↓「二三」七九五―3

(計一例)

▽やわれみぜりきよ(神女名)↓「二七」一一八九―3

(計一例)

⑦は、神女名の中の「ぢへ」と「ぜ」の表記だが、▼は「二三」、▽は「二七」で巻によって、きれいにわかれている。

⑧▼いちや(板)↓「二」四二一三「三」九一―27、一〇一

18「九」五〇七―7「二〇」五一七―8「二二」五六四―

6「二二」六九九―4、七二一―2「二五」一一二二―

7「二六」一一四〇―4「二九」一三一八―2「三〇」

一三八一―2「三一」一四二六―6、一四四四―5、一

四四五―5、一四四六―11、一四四七―6、一四八一―

6(計一八例)

▽いた(板)↓「二〇」五一五―6、五一九―7・9、五

二二一―7、五二四―5、五二八―6、五三〇―8、五三

一一八、五三三―6、五四二―5、五四三―6、五四四―

6、五四五―6、五四七―6、五四八―6、五四九―7、

五五〇―6、五五一―8、五五三―5「二二」六二三―

6、六五一―5「二三」八三八―5、八四九―7、九四

八一―14、九五九―8、九六〇―7、九七二―8、九七五―

7「二五」一〇八二―7(計二九例)

⑧の「板」は、「いちや」が一八例に対し、「いた」が二九例

と、非口蓋化表記の方が多。両様表記の見える巻は、「二〇」「二二」「二五」で、それ以外は重ならない。

⑨▼しちやたりや(下垂り人) ↓「二三」九五四―1・4  
(計二例)

▽したたりや(下垂り人) ↓「二六〇―2」「九」四九二―  
2・9 「二四」九八五―2・3 「二〇」一三三七―3  
(計六例)

⑨は、⑧と同じ「た」の音節だが、▼と▽の存する巻は、⑧  
が▼「二」「二〇」、▽「二三」であったのに対して、⑨が▼  
「二三」、▽「二」「二〇」で逆の関係になっている。

⑩▼しぢやけ(従え) ↓「一〇」五一三―17、「一一」五四  
六一―8・9 「二二」一四一六―8・9 (計五例)

▽しだけ(従え) ↓「一〇」五二三―18、五二四―18 「一  
二」七一九―9 「二五」一一一四―7 (計四例)

⑩は、⑤と同じように、「一〇」五二三に両方の表記が見ら  
れる。

⑪▼くにぢやか(国高「神女名」) ↓「一〇」五四九―2  
(計一例)

▽くにだか(国高「神女名」) ↓「二三」八一〇―5 (計  
一例)

⑪は、▼が「一〇」、▽が「二三」の巻に見えるが、▼「一  
〇」五四九と▽「二三」八一〇は重複オモロの関係にある。

⑫▼あいちへ(相手) ↓「四」二〇三―12、二〇八―10、二

一一―10 「六」二九四―10、二九七―10 「七」三四五―  
4 「二三」八七六―38 「二〇」一三七七―10、一三八〇―  
10 (計九例)

▼あへちへ(相手) ↓「二二」七二〇―11、七四五―10  
(計二例)

▽あいて(相手) ↓「二」三三三―24 「一〇」五二九―20  
(計二例)

⑫は、▼が一例に対して、▽が二例と少ない。

⑬▼いぢへ(出で) ↓「七」三四九―10・14 「八」四三七―

2 「二二」五八四―6 「二三」七九七―7・9・10、七  
九八―6、八五六―2、八八二―6・7、九〇三―7、

九四五―1・5、九六一―10、九六六―2、九七一―2  
「二五」一一〇五―10・14、一一一八―2 「一六」一一

五一―2、一一五四―2 「三〇」一三七二―2 「三一」  
一四五七―15 「三二」一五三五―4 (計二五例)

▼いぢゑ(出で) ↓「二四」九九一―4 (計一例)

▼いぢへら(出でら) ↓「二三」七四六―2 (計一例)

▼いぢへれ(出でれ) ↓「二四」九九八―4・4 (計二例)

▽いで(出で) ↓「一一」五七二―4・5、五八四―5  
「二三」七四七―4、七六四―7 「二四」一〇四六―2  
「二五」一〇七四―3 (計七例)

▽いでら(出でら) ↓「二三」八七八―9 (計一例)

⑬も、▼が二八例に対して、▽が八例と少ない。

⑭▼大みつのみぢよいもい (人名) ↓「一〇」五四一―1  
(計一例)

▽大みつのみてもい (人名) ↓「二三」九五七―1 (計一例)

▼ふるさとのみぢよいもい (人名) ↓「一〇」五四一―3  
(計一例)

▽ふるさとのみてもい (人名) ↓「二三」九五七―3 (計一例)

⑭の▼「一〇」五四一と▽「二三」九五七は、重複オモロの  
関係にあるのに表記が異なっている。なお、仲原善忠・外間守  
善「おもしろさうし辞典・総索引(第二版)」(角川書店)などで  
「大みつのみてもい」「ふるさとのみてもい」とされている「て」  
は「大みつのみぢよいもい」「ふるさとのみぢよいもい」と同  
じ人名であるから、濁音の「で」に改めるべきか。「ぢよい」  
は「[d]e」の音を表記したものであろう。

⑮▼たまやりちよ (玉遣り戸) ↓「一一」六〇四―8 「二二」  
一四二四―8 (計二例)

▽たまやりと (玉遣り戸) ↓「二三」七五五―3 「三三」  
一五四七―3 (計二例)

⑮は、▼「一一」六〇四と「三三」一四二四、▽「二三」七  
五五と「三三」一五四七がそれぞれ重複オモロの関係にあるが、  
表記は一致している。

⑯▼きちよかさに (地名) ↓「二三」九六八―11 (計一例)

▽きとかさに (地名) ↓「二三」九六八―5 (計一例)

⑯は、同一のオモロ「二三」九六八に両語形があり、これは  
⑩と同じ状況。

⑰▼おきにや (沖縄) ↓「一〇」五四六―2 (計一例)

▽おきなわ (沖縄) ↓「三三」九六一―10 「六」三〇〇―3  
「七」三七三―2 「八」四二八―3 「二二」五八六―7、  
六三三―3 「二三」八六六―2、九七五―3 「二九」一  
三二八―1・4 「三〇」一三九―1・3 「三二」一四  
七三―7、一四八一―3 (計一四例)

⑰は、▼が一例しかない。しかも、本来なら「おきにやわ」  
とあるべき、「わ」が脱落している。

⑱▼いにやくに (稲国「地名」) ↓「二二」一四一〇―14  
(計一例)

▽いなくに (稲国「地名」) ↓「二二」五五八―16 「二四」  
一〇三七―7 (計二例)

⑱の例は、▼「二二」一四一〇と▽「二二」五五八と▽「二  
四」一〇三七の計三首のオモロがすべて重複関係にある。

⑲▼こしりやへ (神女名) ↓「二三」八四九―1・4 (計二  
例)

▽こしらひ (神女名) ↓「七」三九一―1・4 「一〇」五  
四〇―3 「二二」一四四六―1・2 「三三」一五四六―  
1・4 (計七例)

▽こしらへ(神女名) ↓「一〇」五四〇—1「一一」五九四—8「一二」六九七—1・2(計四例)

▽こしらゑ(神女名) ↓「二一」一四六一—8(計一例)

⑭は神女名の例だが、▼が二例に対して、▽は一二例と多い。

以上をまとめると、▼と▽の両語形が見える自立語は①～⑭の一九語で、そこに何らかの法則や傾向を見出そうとしても、個々の例でまちまちであった。ということは、巻毎で表記法が定まっていたとは言えそうにない。中には、⑤「一九」一三三〇・⑩「一〇」五二三・⑯「二三」九六八のように、同じオモロで▼と▽の見られる例もある。おそらくこれは、実際の発音が違っていたからであろう。

こうした現象を見ると、ますます耳で聞こえたままに表記していたのではないかと推察され、結局そのように考えておくのが、穏当なのではないか。

二

次に、今回調査した自立語に見える▼(口蓋化表記)と▽(非口蓋化表記)の巻別の用例数を、拙論『おもしろさうし』における助詞ガの表記(『法政大学文学部紀要』第四一号、一九九六年三月)で明らかにしたイ段音の直後の歌謡の▼「ぎや」(口蓋化表記)と▽「が」(非口蓋化表記)の巻別の用例数と、あわせて上下に並べて一覽してみる。

全巻計	卷二二	卷二一	卷二〇	卷一九	卷一八	卷一七	卷一六	卷一五	卷一四	卷一三	卷一二	卷一一	卷一〇	卷九	卷八	卷七	卷六	卷五	卷四	卷三	卷二	卷一	
一〇九例	一例	一一例	五例	三例	〇例	一例	五例	四例	八例	二六例	七例	七例	八例	二例	一例	七例	三例	〇例	六例	三例	一例	〇例	
一一一例	四例	一〇例	四例	三例	〇例	五例	〇例	三例	六例	二二例	四例	一一例	二四例	二例	三例	四例	一列	〇例	〇例	三例	一例	一例	
四七六例	一二例	二三例	二四例	一例	八例	一〇例	一一例	三例	二二例	二六例	五一例	一七例	二九例	一五例	九例	三三三例	二〇例	二八例	二五例	六七例	二例	四一例	
三五〇例	四例	七四例	五例	三例	二例	七例	一例	四例	六例	八七例	三二例	五九例	八例	三例	一例	七例	三例	二八例	三例	七例	三例	三例	
																						▼自立語	
																							▽自立語
																							▼「ぎや」
																							▽「が」

右の表から、個々の巻で云々するのは用例数も少なく、同じ傾向もあれば、逆のものもあり、自立語と助詞ガで共通点・相違点の法則を見出すことはできそうにない。法則性が見られないということは、巻による表記の規範がまさに確立されていないかつた証拠と言えよう。そこで、全巻の総数を比較すると、自立語が▼四九・五% (口蓋化表記) 対▽五〇・五% (非口蓋化表記)、助詞ガが▼五七・六% (口蓋化表記) 対▽四二・四% (非口蓋化表記) で、助詞ガの方がやや口蓋化しやすいことがわかる。

### 三

本稿で得られた結果は、かつて筆者が発表した以下の拙論で論じた表記と発音に関する部分の解釈と矛盾しない。そのことについて、ここで確認しておこう。

拙論「『おもろさうし』における四段動詞の再構連用形について」(『沖繩文化』六一号、一九八三年九月) ⇨「おもろさうし」では「四段動詞+助詞テ」のテの部分の表記が、四段動詞の活用する行の違いにより、「て」と「ちへ」に書き分けられているという事実がある。いくつか例を示そう。

A 「四段動詞+テ」の「ちへ」表記例

カ行↓おちへ (置きて)・きちへ (聞きて)・ひちへ (引き  
て)・ふちへ (吹きて)

サ行↓おちへ (押して)・さちへ (差して)・おとちへ (落

として)・かくちへ (隠して)  
タ行↓うちちへ (打ちて)・うちへ (打ちて)・もちちへ  
(持ちて)・もちへ (持ちて)

B 「四段動詞+テ」の「て」表記例

ハ行↓あて (合ひて)・おもて (思ひて)・ねがて (願ひて)・  
むかて (向かひて)  
マ行↓つて (積みて)・おがで (拝みて)・こので (好みて)・  
やすで (休みて)  
ラ行↓とて (取りて)・いのて (祈りて)・つくて (作りて)・  
ほこて (誇りて)

このように、Aのカ・サ・タ行の四段動詞の場合には「ちへ」表記で、Bのハ・マ・ラ行の四段動詞の場合には「て」(マ行は「で」表記になっている。この区別は実際の発音を踏まえて記録したものと考える以外にないだろう。そして、この書き分けは脱落した連用形語尾を再構し、語を認定する際に役立つ。実例を挙げよう。

なちへ (成して) —— なて (成りて)  
かわちへ (交わして) —— かわて (変わりて)  
こちへ (漕ぎて) —— こて (乞ひて)  
まわちへ (回して) —— まわて (回りて)  
もどちへ (戻して) —— もどて (戻りて)

このように「て」と「ちへ」には厳然とした書き分けが見られ、例えば大和的に「て」表記に統一されることはなかった。これも表記者がオモロ詠唱時の助詞テの実際の発音を聞いたとおりに書き写した証拠の一つと言えよう。

拙論「按司（アヂ）の語源について」（『鶴見大学紀要・国語  
国文編』二六号、一九八八年三月）⇩『おもろさうし』では  
「按司（王国時代までの沖縄における土地・人民の支配者の人  
物）」を「あんじ」または「あぢ」と表記し、どちらか一方に  
統一していないが、それは発音が異なっていたからに相違ない  
と考えられる。すなわち、「按司」はアヌシ（吾主）が原形と  
思われ、それが変化する過程（*anusi* ⇨ *ansi* ⇨ *anzi* 「あんじ」  
⇨ *azi* 「あぢ」）の段階（遅速ないしユレ）を忠実に書き分けた  
結果と解釈できる。これと同様の現象（表記上のユレ）に、  
「頂（最上）」を「つんじ」または「つぢ」と書いた例が「おも  
ろさうし」にある。これはツムシ（旋毛）が原形であり、これ  
もその変化の過程（*tumusi* ⇨ *tumsi* ⇨ *tunzi* 「つんじ」*tuzi* ⇨  
「つぢ」）で、「按司」の場合と同様に二通りの表記がなされた  
のであろう。

拙論「『おもろさうし』における助詞ガの表記」（『法政大学  
文学部紀要』四一号、一九九六年三月）⇩『おもろさうし』の  
助詞ガの表記は、「ぎや」と「が」の二種あるが、「ぎや」の方  
は直前にイ段の仮名が来る時に限って現れ、例外はない。この  
現象は「*ga*」に先行する音、例えば「*きこえ* 大きみ」の「*hi*」  
の*i*母音の影響で口蓋化を起こして、「*gi*」に変化した音を  
「ぎや」と表記したと解される。一方、直前がイ段以外のア・  
ウ・エ・オ段の仮名の場合は決して口蓋化を生じることなく、  
右の例の「とよむせだかこが」のように、必ず「が」表記になっ

ている。このことは*i*と*e*母音の区別が「おもろさうし」編纂  
当時にあったという何よりの証拠になるはずなのだが、従来そ  
のような指摘はないようである。しかし、直前がイ段の仮名だ  
からといって必ず「ぎや」になるわけでもない。例えば「てに  
（天）が」という表記例がある。一方、「おもろさうし」の中に  
は、口蓋化した「てに（天）ぎや」も見える。このようにイ段  
の仮名に直統する同じ条件下でも「が」と書かれたり、「ぎや」  
と書かれたりしている。結局こういった現象（大和的に「が」  
表記に統一しなかつた理由）は、表記者が詠唱時の助詞ガの実  
現音を聞いたとおりに書き写したものと考えるのが穏当であろ  
う。それは助詞ガを「が」か「ぎや」のどちらか一方の書き方  
に統一していないからである。

拙論「『おもろさうし』における類推表記（*u* ⇨ *o*）の再検  
討」（法政大学沖縄文化研究所紀要「沖縄文化研究」二四号、  
一九九八年三月）⇩『おもろさうし』には、「国」を「くに」、  
「主」を「のし」と表記した例がある。これについては、「おも  
ろさうし」編纂時には *u* ⇨ *o* の変化は相当に進んでいたと  
考えて、そういう状況下においてはウ段の音をことさらオ段の  
音に戻そうとする意識が強く働き過ぎ、その結果、「くに（国）」  
や「のし（主）」と書かれてしまった、と従来解釈されている。  
この種の表記は「類推表記」と呼ばれている。しかし、これら  
は「おや（親）こに（国）」や「世ののし（主）」のように、ウ  
段音が本来的な表記であるにもかかわらず、オ段音の仮名で表  
記される場合がある現象は、「きこえ」が大きく印象度の強い

a・oが、その音節の直前（まれに直後）で働きかけ、口室の狭いuは口室の広い同じ円唇性のoに転じたのであり、それを表記者が忠実に聞き写したのではないか、と釈する余地があることを論じた。

これら既発表の拙論から、「おもろさうし」は詠唱されていた実現音を表記者が聞いたとおりに文字化したものだ、と推定し得る根拠を四点ほど示した。

### おわりに

以上、「おもろさうし」において、同一の自立語が口蓋化と非口蓋化で両様表記されている例を取り上げた。こうした表記が存在するということは、単語による表記の固定化がなされていないのであるから、これは発音の仕方が異なっていた何よりの証拠であろう。

ちなみに、和語に対応する語で、▼口蓋化表記の方しか見られない自立語の内、一〇例以上あるものに限って例を挙げてみる。

- ▼いきや（如何）↓（計一九例）
- ▼いきや（行かす）↓（計一二例）
- ▼いきよ（い請）↓（計一六例）
- ▼いちや（い出）↓（計一〇例）
- ▼いみや（今）↓（計四一例）

右などは、明らかに方言的な発音を写したもので、「おもろさうし」が大和の仮名遣いを規範としていたとは、考えられない表記例だと判断される。もし大和の仮名遣いを規範としたならば、例えば「今」は「ima」と発音されていたとしても、「いみや」でなく「いま」と書かれたはずである。

本稿でも、詠唱されていた実際の発声音を表記者が聞きなしたとする、筆者の今までの見通しを肯定する資料を追加できたと結論づけられよう。

（まみや あつし・文学部助教授）